

吉野町教育委員会 森林環境教育(森林ESD)プログラム分析シート

プログラム名：		わかばこども園「森と遊ぼう」	
(1) プログラムの目標		わかばこども園のもつ教育資源（自然環境・地域人財力・幼稚園型施設としてのこれまでの実績等）を活用した取組を通じて、ふるさとに対する理解や愛着を深め、将来にわたって地域を大切にする気運を醸成する。また本町の「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取組（木育）のひとつの実践の場として、森と水の関係の理解を通して本町の地勢的特性である豊かな河川・森林とふるさとの歴史・文化・産業の関わりを森での遊びを通じて学ぶきっかけをつかむ。 子供達が、年齢の垣根を越えて意図的に交流できる場をつくり年下の子供は、年上の子供の活動を見て学び憧れを抱き年上の子供は年下の子供の世話をし、教えることに自信をもち、思いやりの心を育てる。社会性や協調性を自ら学んでほしい。	
(2) プログラムの概要		これまで、わかばこども園区に在住されている森林インストラクターと保育教諭が連携して実施してきた本園の「森と遊ぼう」活動は、本年度は、本町の地域おこし協力隊4名（木工担当・木育担当）の活動支援を受けることとなり、園との連携の輪が広がっている。吉野の四季の移ろいにあわせて、年間5回にわたり園外活動として実施。インストラクターのドイツでの森の幼稚園のお話から始まり、七夕まつりに使う笹竹取りで森に入り、また森の不思議を感じようをテーマに地域の森でふるさとの昔ばなしを聞いたり、園児みずから拾い集めた自然物を使ってのネイチャークラフトづくり、年長児は活動を通して感じたことを森の中や園内で友達や保育教諭に発表するふりかえりを取り入れたプログラムとなっている。	
(3) プログラムの展開			
活動内容について、プログラムの流れで、記載する。 合わせて、段階的な学びとして、3つのタイプのアクティブ・ラーニング（in、about、for）の視点で活動内容を区分してみる。 ・in（～の中で）－ 体験、観察、製作など（関心・意欲、知識・技能） ・about（～について）－ 情報収集・分析、情報交換、討論など（知識・技能、思考・判断・表現） ・for（～のために）－ 提案、実践など（態度、参加・行動）			
時間数	プログラムタイトル		
	活動内容	指導・支援の方法、ポイント等（教材等）	
in、about、for の視点で活動内容を区分			
年間計画 3時間 活動打ち合わせ 2時間×5回 下見 2時間×5回 計23時間	森と遊ぼうのための準備		
	森林インストラクターとの打ち合わせ 地域おこし協力隊との打ち合わせ インストラクターとの現地地下見 年間活動プランのテーマの共有	保育教諭に森と遊ぼうについて理解してもらう。 下見により、森林体験が少ない保育教諭に実体験させる 安全対策として服装や支援児童への配慮など注意すべきことを互いに確認 プログラム実施の役割分担を明確化 当日の服装等の保護者への注意喚起・当該活動への理解・情報共有	
	about 情報の共有、安全対策		
約30分×5回 計2時間半	森と遊ぼう プロローグ 森のおじさんのお話		
	森林インストラクター・協力隊の森と木のお話	活動連携者との出会いを森と木の話を経介して園児に印象づける。 保育教諭は、活動連携者の話を日常の教育保育活動へ結びつけながら、はじまろうとする園外活動への期待の高まりが伴う森への関心を引き出す。	
	about 子供達へのファーストメッセージ 森への誘い 対話		
約1時間半×3回 約4時間×2回 計12時間半	森と遊ぼう		
	プログラム中に設定された設問内容の活動補助者による語りかけ 気づきを言葉に表現して質問 森でのクラフト・ゲームの展開	活動補助者が指導する。保育教諭は、子供達が表現すること（かたち・言葉）を深く観察し、個々の気づきを全体で共有させる機会を逃さない。 個々の子供達の気づきを大切にする。	
	in 森の中での体験		
2時間×5回 計10時間	ふりかえり		
	保育教諭と活動連携者との活動のふりかえり	森と遊ぼうの活動後に活動全体の良かった点や改善点についての話し合い、情報共有をすることで、より良い活動にしていく。保育教諭と活動連携者との活動への想いの確認、活動のねらいの共有。	
	about 森と遊ぼうの分析 情報交換 討論		

園内活動とのつながり	
年中行事との接続(七夕まつり:園内活動で、飾り短冊づくりを行い、飾るための笹を森から切り出す等) 森で採集した自然物と木片を利用した作品づくり	園内活動と園外活動の接点を上手く生かして、森の中での子供達の内的心象の継続を図り、定着化をおこなう。 園外活動で得た素材を使った園内活動での表現活動の更なる展開。
for 森の中で体験を園内活動に活かす	
(4) プログラムでの連携内容 (教育機関、地域、団体等での、①連携・協働先、②役割分担、③具体的な連携・協働の内容)	
①森林インストラクター ②専門的領域からの保育教諭、園児への助言・指導／地域住民としての教育保育活動への参画 ③プログラムづくりへの参画・地域の教育資源活用への働きかけ、連携コーディネート／所有林の提供／フィールドの整備・安全な環境の維持	
①地域おこし協力隊(木育・木工担当) ② 園外活動の支援／森や木に関わる園児へのメッセンジャー／専門的領域から保育教諭の木育への助言・園内活動の支援 ③ 園外活動の安全確保への支援／プログラムの多様な展開を可能とする各専門領域でのノウハウ提供	
幼保連携型認定こども園 教育・保育要領との関連 (※わかばこども園：幼稚園型認定こども園)	
満3歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容	
健康	健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う
人間関係	他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人の関わる力を養う
環境	周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活にとりいれていこうとする力を養う
言葉	経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。
表現	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
健康及び安全	健康支援 食育の推進
子育ての支援	家庭と連携した支援 保護者及び地域が有する子育てを自ら実践する力の向上
森林環境教育の視点	
1 感性的経験	感性的な内容 — 森林の感覚的把握や美的把握、畏敬の念など
2 自然的特性	森林の自然的特性に関わる内容 — 植物や動物の生態など
3 多面的機能	森林と人とのかわりに関する内容 — 森林の働き、保安林など
4 現状・課題	森林の現状に関する内容 — 森林の荒廃、人手不足など
5 管理・維持	森林の管理・維持に関する内容 — 森林整備、育成、維持、管理など
6 歴史・文化	森林とのかかわり方の歴史 — その土地での歴史、薪炭林、炭焼き
(5) 活動の分析(学習指導要領との関連または森林環境教育の視点) 上位3項目	
教科・項目、視点	学習内容
1 感性的経験	「森林の感覚的把握・美的把握」 足から伝わる土の柔らかさを歩きながら感じ、森の中でハンモックに揺られて木漏れ日を見上げ、川に手をつけ水の冷たさに驚き、山の頂上からの景色を見て、自然の心地よさや自分たちの育つふるさとの美しさを感じる。
2 自然的特性	「地域環境への関心・森林体験」 身近にある森に入り、吉野では昔から山や木と人が寄り添って生きてきた歴史があることを肌身で感じ、自然環境と人との関係についての関心を高める。(山に入る時は山の神様に挨拶をする) ハンモック・竹の滑り台・丸太のシーソーなどの森林体験があることで、森のおじさんの話(木の特徴や自然の生態について)をより興味を持って聞くことができる。
3 多面的機能	「暮らしの中にある森での体験と、園内活動への広がり」 園児が採集してきた自然物を使った製作や、園内の木工コーナーの設置など、園内で日常的に森や自然を感じられるような環境づくりがされている。園では森での体験とは違い、作りたいものをイメージする想像力や、試行錯誤し作り上げる集中力が培われる。またものづくりの中から生まれた異年齢の園児のコミュニケーションなどもあり、森と遊ぶ活動が多面的な機能を持っている。

(6) 活動の分析 (資質・能力の視点)				
E S Dの要素 (生きる力)	能力	1 批判的に考える力	態度	5 他者と協力する態度
		2 未来像を予測して計画をたてる力		6 つなぐ力を尊重する態度
		3 多面的、総合的に考える力		7 進んで参加する態度
		4 コミュニケーションを行う力		
資質・能力 三つの柱	①生きて働く「知識・技能」の習得			
	②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成			
	③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養			
次期学習指導要領では、持続可能な開発のための教育（E S D）等の考え方も踏まえつつ、「生きる力」とは何かを、「資質・能力」（三つの柱）に沿って具体化するとしています。 活動を、三つの柱の項目に再整理して記載してください。（該当がない項目は空欄）				
項目	E S Dの要素（7つの能力・態度）の視点で見つめ直して、もっとも重視する視点の内容を記載してください。			
①生きて働く「知識・技能」の習得	「3 多面的・総合的に考える力」 森林インストラクターから、ふるさと吉野の昔のことや、自然の生態や特徴について話を聞く。また、その時にイラストを使ったり、体験を取り入れることで子どもが興味を持てるようにする。道具（のこぎり・金づち・ドライバー・釘・ビス）の扱い方を習得する。 自然の知識や、道具を扱う技能を、体験を通して学び、園外・園内のどちらの環境においても子どもたちが身近に感じられるようにすることで、ふるさととの自然と自分たちの暮らしについて多面的・総合的に考えるようになる。			
②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成	「4 コミュニケーションを行う力」 様々な素材を使い、表現を仕方を考え工夫して作ったものを、友達や保育者の前で発表する。年長児は園内に設置された木工コーナーで木片を利用して作ったピタゴラスイッチ（どんぐりを転がすゲーム）を友達同士で相談し合い、どうすればうまく転がるコースができるかを考えて製作していた。 さらに、それを小学校1年生との交流会で発表し、自分よりも年上の児童と一緒に遊び、意見をもらうことで新たな課題や発想力を得た。			
③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養	「7 進んで参加する態度」 森林インストラクターや地域おこし協力隊と森や木、自然に関する対話の中で興味を持ち、自ら学ぼうとする意識を身につける。 長い森の道のりを自分の足で歩ききり、高いところにある木の橋を1人で渡り切る、ロープを使って急な斜面を登るなど、成功体験を積み重ね、自らまた新しい目標設定をして挑戦する力を身につける。 年中児が木工で難しい部分を、年長児に助けをもらい、作品を完成させるといった様子が見られるように、年齢を超えた森と遊びを通して生まれた関係性がある。			
(7) 実施後、参加者の変化				
保育教諭の中に、森と遊びの子供達の感動を園内活動にも積極的に取り入れようとする姿勢が生まれ、園教室内に木工ブースを設置、教室内で木とふれあう機会を創出している。 園児に、森での森林体験のきっかけに、主体性をもった行動が芽生えている。また、園外活動と園内活動に連続性が生まれ、森への関心が日常の園生活の中で遊びの中に取り入れられている。園庭の木々にも関心が高まった。				
(8) 安全対策として事前・当日の取組事項				
森での活動においては、事前の下見等で危険箇所、プログラム上のリスク管理を連携者に支援を求めるなかで万全を期して。万が一の場合に備えての緊急対応の手順についても事前に連携を図り、明確化を図っている。実施後の振り返りにおいても、危機管理面からの検証は、毎回実施している。				
(9) プログラムの今後のめざす方向・展開				
森と遊び活動を通じて得られた成果を、園活動の中の木工の取組として更に深化させる。教育・保育要領の5領域の目指すところを念頭に、吉野町でしかできない木工の基盤を形成する位置づけのプログラムとして地域人財との連携の上で、高めていきたい。将来的には、地域住民の自主的な活動への展開の道筋を提案できればと考えている。				
(10) 現状での課題、質問事項など				
継続性が課題である。				